

## 高等部普通科生徒に対する国際手話講座の成果と課題

榎戸 里佳・澤口 真弓・水野尾 哲也・宮本 安希子・鎌田 ルリ子・久川 浩太郎

本年度は、高等部普通科生徒を対象として、講師を招いて国際手話講座を実施した。各学年2回の講座を設定し、指文字や基本会話、自己紹介、数字とお金の表現など、講義やペアでの対話活動を通して展開された。講座実施後のアンケート調査の結果、多くの生徒が国際手話や外国の手話、海外の人々とのコミュニケーションを肯定的に捉えていることがわかった。

キー・ワード：国際手話 コミュニケーション 異文化理解 外国語学習

### 1 はじめに

近年、国際交流への意識の高まりを背景に、筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）では海外との教育連携や交流活動が活発化している。本校高等部普通科ではフランス国立パリ聾学校（以下、パリ聾学校）との交流を継続的に実施しており、アメリカ手話（以下、ASL）やフランス手話（以下、LSF）、国際手話に関心を示す生徒も少なくない。さらに、2025年度は日本でデフリンピックが開催されたことから、国際手話に対する社会的関心が一層高まっていた。

こうした状況を踏まえ、本校では高等部普通科生徒を対象に国際手話講座を実施し、その教育的意義と課題を検討した。本実践では、筑波技術大学で国際手話通訳に関する指導を行い、東京2025デフリンピックに向けた国際手話通訳研修会を担当し、さらに同大会で国際手話通訳を務めた小林洋子氏を講師として招聘した。

本稿では、アンケート調査の結果をもとに、国際手話講座の成果と課題を報告する。

### 2 国際手話講座の実施

#### (1) 実施日程

高等部普通科の各学年で2回実施することにした。各学年の日程を示す（Table 1）。

	第1回	第2回
1 学年	12月4日	12月11日
2 学年	7月1日	9月2日
3 学年	9月12日	9月26日

#### (2) 講座内容

第1回の内容は、国際手話の概要、使用される場面（デフリンピック、世界ろう者会議、ろう教育国際会議など）、国際手話の指文字、指文字の練習（指文字クイズ）、基本会話（あいさつ）、疑問文、自己紹介のペア活動、参考になるサイトや書籍の紹介であった。自己紹介のペア活動では、名前、サインネーム、出身国を話す練習をした。

第2回の内容は、国際手話の豆知識（背景、英文法との違い、国際手話を使って交流できる場所など）、第1回の講座の復習（指文字・あいさつ・疑問文）、数字とお金の表現、買い物場面のペア活動であった。買い物場面のペア活動では、店員と客の役になり、客役がお店で扱う商品の値段を尋ねて店員役が答える、客役がその値段に応じて反応するというポイントが設定されていた。

#### (3) アンケート調査

1～3学年の生徒に対し、各講座終了後にMicrosoft Formsを使用した選択式及び記述式の電子アンケート調査を実施した。

### 3 調査結果

第1回の講座終了後は65名、第2回の講座終了後は39名の生徒から回答が得られた。

#### (1) 手話の学習状況や使用状況に関する質問

##### ① 日本の手話以外の学習経験

これまで日本の手話以外の手話を学習した経験があると回答したのは55%、学んだ経験がないと回答したのは45%であった。回答した生徒のうち、過半数の生徒は学習経験があるという結果に

なった。

また、学習経験のある手話について、ASLの指文字が31名、簡単な挨拶が28名、自己紹介程度22名、国際手話（指文字）20名、LSFや国際手話の簡単な挨拶および自己紹介程度が10名、LSF（指文字）7名、ASL（日常会話程度）とLSF（自己紹介程度）が5名、国際手話（日常会話程度）2名、その他2名であった（Fig. 1）。

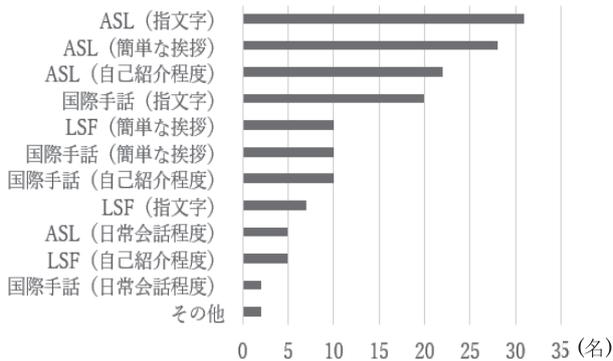


Fig. 1 手話学習経験

さらに、これまでに日本の手話以外の手話を学んだ場面について、小・中学校、英語の教師に教えてもらったと回答した生徒は18名、友人から学んだという生徒が7名、パリ聾学校との交流、世界大会等での交流、家庭学習や塾等、自主的にメディア（映画、ニュース、YouTube）で学んだという生徒が各3名であった。

## ②パリ聾学校との交流でのコミュニケーション手段

日本の手話23%や英語（筆記）20%と生徒が慣れ親しんだコミュニケーションを用いる割合が高かったが、ASL15%、国際手話10%、LSF8%と海外の手話も30%程度活用しているようであった。続いて、日本語（音声）8%、日本語（筆記）5%、英語（音声）とフランス語（筆記）4%、その他3%であった（Fig. 2）。

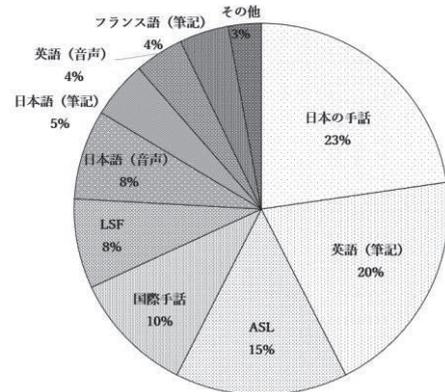


Fig. 2 パリ聾学校との交流でのコミュニケーション手段

## (2) 国際手話やコミュニケーションへの興味関心

### ①国際手話への興味関心

国際手話講座を実施する前は国際手話に興味関心があったと回答したのは58%、なかったと回答したのは42%であった。

### ②国際手話を学習したい理由

国際手話を学習したい理由について、海外の人々とコミュニケーションをとるためが最多で55%、興味関心が24%、デフリンピックに関連した内容が10%、視野を広げるためという内容が8%、その他3%であった（Fig. 3）。

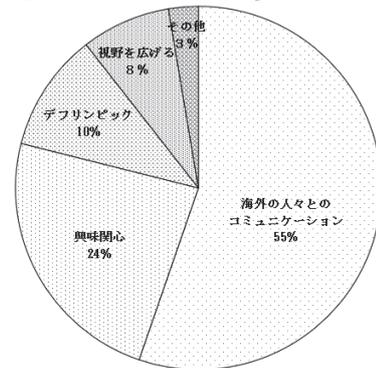


Fig. 3 国際手話を学習したい理由

### ③海外の手話やコミュニケーションへの態度

海外の手話やコミュニケーションへの態度について、6つの項目を設定した。「あてはまる=5点」「ややあてはまる=4点」「どちらともいえない=3点」「あまりあてはまらない=2点」「あてはまらない=1点」として平均を集計した。第2回の講座終了後、ほとんど4.00以上の値となった。国際手話や外国の手話、コミュニケーションへの意欲を示した生徒も多かった（Table 2）。

Table 2 手話やコミュニケーションへの態度

質問項目	平均	
	第1回	第2回
① もっと国際手話を学びたい	4.23	4.26
② 外国の手話（国際手話以外）を学びたい	3.86	4.00
③ 国際手話を使ってコミュニケーションをとれるようになりたい	4.14	4.15
④ 国際手話を使って案内をしたい	3.55	3.59
⑤ 海外のろう者と関わりたい	4.11	4.23
⑥ 国際手話を身に付ければ、海外でもコミュニケーションをとることができると思う	4.25	4.15

### (3) 国際手話の習得状況

国際手話の習得状況について、講座内容を踏まえて、受容および表出について項目を作成した。

「講座を受ける前からできていた、あてはまる＝5点」「ややあてはまる＝4点」「どちらともいえない＝3点」「あまりあてはまらない＝2点」「あてはまらない＝1点」として平均を集計した。第1回終了後は4.00以上の値となったのが受容①②と表出④⑥⑦のみであったが、第2回終了後は、受容①～③、表出④～⑨は4.00以上の値となった（Table 3）。

Table 3 到達度の自己評価

質問項目	平均	
	第1回	第2回
受容 ① 指文字を読み取ることができる	4.02	4.26
② 簡単な挨拶を理解することができる	4.18	4.38
③ 簡単なやり取りを理解することができる	3.89	4.28
表出 ④ 自分の名前前の指文字を表すことができる	4.55	4.67
⑤ 全ての指文字を表すことができる	3.91	4.23
⑥ 簡単な挨拶をすることができる	4.12	4.44
⑦ 自己紹介をすることができる	4.09	4.26
⑧ 簡単な質問をすることができる	3.65	4.10
⑨ 簡単な質問に答えることができる	3.65	4.03
⑩ 簡単なやり取りをすることができる	3.55	3.95

### (4) 国際手話講座の感想

#### ① 自己紹介のペア活動

自己紹介のペア活動について、学びが20件、肯定的な意見が10件、難しさが13件であった（Table 4）。表情の大切さや手話表現に関する学び、ジェスチャーの活用、日本の手話やASLとの表現方法の違いによる難しさ、読み取りや表現の難しさについての意見が確認された。

Table 4 自己紹介のペア活動の感想

グループ	件数	
学び	表情の大切さ	7
	手話表現	6
	ジェスチャーの活用	5
	経験の必要性	2
肯定的意見	10	
難しさ	表現方法の違い	7
	読み取り	3
	表現	3
合計	43	

#### ② 買い物場面のペア活動

買い物場面のペア活動について、学びに関する内容が16件、肯定的な意見が15件、難しさが7件、その他3件であった（Table 5）。

Table 5 買い物場面のペア活動の感想

グループ	件数	
学び	表情の大切さ	8
	手話表現	6
	気持ちの大切さ	1
	伝えたいことをイメージする大切さ	1
肯定的意見	15	
難しさ	7	
その他	3	
合計	41	

#### ③ 国際手話講座で学んだこと

第1回と第2回の講座終了後に国際手話について学んだことなどを尋ねた。第1回終了後、表現に関する意見は、日本の手話やASLとの相違点が17件、類似点が8件、表情の大切さが7件、地域による違いが4件、その他表現に関する内容が3件であった。肯定的な意見は22件あり、世界のろう者につながるツールという内容が7件、学習意欲に関する内容が6件、コミュニケーションへの意欲を示した内容が5件、楽しい・面白いという

内容が4件であった。一方で、難しさに関する内容が5件、その他7件であった (Table 6)。

Table 6 国際手話講座で学んだこと(1)

	グループ	件数
表現	手話の相違点	17
	手話の類似点	8
	表情の大切さ	7
	地域による違い	4
	その他表現に関する内容	3
肯定的意見	ろう者とつながるツール	7
	学習意欲	6
	コミュニケーション意欲	5
	楽しさ・面白さ	4
難しさ		5
その他		7
合計		73

第2回終了後は、さらに、国際手話の概要に関する内容5件、英語との関連性3件、ジェスチャーの活用2件もみられた (Table 7)。

Table 7 国際手話講座で学んだこと(2)

	グループ	件数
表現	手話の相違点	11
	手話の類似点	4
	表情の大切さ	4
	英語との関連性	3
	ジェスチャーの活用	2
	肯定的意見	楽しさ・嬉しさ・よさ
肯定的意見	国際手話の概要	5
	ろう者とつながるツール	2
	学習意欲	2
	難しさ	
その他		3
合計		43

#### ④どのように生かしていきたいか

第2回終了後のアンケートから、海外の人々に会った時、海外に行った時、デフリンピックや国際試合など、海外のろう者とのコミュニケーションで生かしたいという意見が37件、その他5件であった (Table 8)。

Table 8 国際手話の学びを生かす場面

	グループ	件数
海外の人々とコミュニケーションをとりたい	海外の人々と会った時	14
	海外に行った時	8
	デフリンピックや国際試合	6
	来日した時	5
	パリ聾交流	3
	交流イベント	1
その他		5
合計		42

#### ⑤今後学習したい内容

2回の講座を通して、今後学習したい手話表現は日常会話などが最多で43件であったが、日本の手話と似ている手話・異なる手話、観光案内の表現も含まれた。実践については、生徒同士、海外のろう者、海外の聾学校との交流で実際にやり取りをしたいという意見やクイズ・ゲーム形式で学びたいという意見もみられた (Table 9)。

Table 9 今後学習したい内容

	グループ	件数
手話表現	日常会話など	43
	指文字	3
	日本の手話との比較	2
	観光案内	2
実践	会話	15
	海外の人	9
	生徒同士	9
	海外の聾学校との交流	3
	活動	3
学習方法	国際手話を学ぶ方法	5
その他		6
合計		100

#### 4 結果の考察と今後の展望

##### (1) 手話の使用状況や学習状況

小・中学校段階で海外の手話 (特にASL) について学校で学んだり、教師や友人から教えてもらったり、自分で興味関心をもって学んだりした経験がある生徒も多いことがわかった。

また、パリ聾学校との交流でも、日本の手話や英語を活用しつつ、ASLやLSF、国際手話を使用した経験がある生徒がおり、実際に使用する場面があると国際手話の学習意欲や必要性が高まるのではないかと考える。

##### (2) 国際手話や海外への興味関心

Fig. 3より、国際手話学習の動機として、海外の人々とのコミュニケーションを挙げる生徒が過半数であった。本校ではパリ聾学校との交流を継続的に実施しており、国際手話を使う可能性もある。また、本年度はデフリンピックが自国で開催されたことや、本校在学中に留学や海外研修への参加を希望する生徒もいることから、国際手話への関心も高まったのではないかと考える。

### (3) 国際手話の習得状況

Table 3より、2回の講座を経て、指文字、簡単な挨拶、簡単な質問、応答の受容および表出はできるという実感をもつことができた生徒が多いといえる。2回の講座でも簡単な質問や応答について肯定的な評価をした生徒が多かったため、今後の国際手話講座等を通してさらに学習を進めれば、簡単なやり取り、日常的な会話などができるようになるのではないかと考える。

### (4) 国際手話講座の課題

本実践は、講師が基本的に音声を用いない手話のみで講座を展開した。国際手話の表現について教示する際には、スライドに英語を提示しながら国際手話で表現していた。本校の生徒の多くは、日本語の音声と手話を合わせた授業形式に慣れており、手話のみの講座は慣れない様子の生徒もいた。特に、普段口話を中心にコミュニケーションをとっている生徒にとって50分間手話のみで音声が聞けない状態は緊張感がある様子であった。

第1回の講座の時点では、1学年の生徒は予想以上に英語の指文字を知らず、戸惑う様子がみられた。そのため、各クラスに指文字表を掲示した結果、第2回の講座ではそれらを活用して表出する様子がみられた。国際手話講座の前に指文字を知っているだけでも、より親しみをもちながら講座に参加することができるのではないかと考える。

また、講師が日本の手話で講義をしている最中に、国際手話の表現を一部紹介すると、国際手話への切り替わりを読み取るのに苦労する様子の生徒もいた。音声言語では発音やアクセントによって言語の切り替わりを認識できるが、手話に不慣れた生徒は、講師の表情や手話表現の違いからその切り替えを読み取る必要がある。これは手話に不慣れた生徒にとって新鮮な経験であり、気づきの契機となったようである。

国際手話に関する講座は2回のみで、限られた時間の中でペア活動を行いながら学習した。ペア活動を通して、表情やジェスチャーの大切さを体験的に感じている様子がうかがえた。また、国際手話を通じたという成功体験により、国際手話を

学ぶよさやコミュニケーションの楽しさを示す意見も多くみられた。

一方で、実際に会話で用いる難しさを感じている生徒もいた。講義は、講師の手話表現を見てその場で模倣し、生徒が実践した後、クイズやペア活動で受容や表出の練習をするという形式で進められた。クイズやゲーム形式での活動をしたいという希望があったことやペア活動を通して難しいと感じる生徒もいたことから、会話形式の実践に入る前に、十分な活動時間を確保することで心理的にも講座に参加しやすくなるのではないかと考える。

さらに、実際に国際手話を使って会話をしている場面を見たいという意見や日常生活で使う手話について知りたいという意見もみられた。そのため、実際に国際手話を用いて会話する様子を提示して、生徒にどのようなやり取りをしていたかを考えさせる活動等も有効である可能性がある。

生徒によっては、日本の手話やASLと比較して、共通点や相違点を見出しながら学習することができた。そうした気づきを促すために、生徒とやり取りをしながら講座を展開したり、リフレクションで気づいた点を共有したりすると、より手話表現の面白さを感じたり、生徒同士での学び合いが生まれやすくなるのではないかと考える。

### 〔謝辞〕

本研究で報告した取組は、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターの小林洋子氏の協力を受けて実施されたものであり、ここに感謝の意を表す。

### 〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。